いよいよ来年、そしてその先に向けて

パラスポーツ支援への取り組み

経済同友会では東京オリンピック・パラリンピック2020委員会を中心に、東京大会の開催に向けた準備と協力およびパラリンピック競技を主とする支援活動などを継続的に行ってきた。大会開催を来年に控え、大会運営支援と競技支援も、一層活発化している。ここではパラスポーツについての支援活動を取り上げる。

「車いすラグビーワールドチャレンジ2019」を視察

東京オリンピック・パラリンピック2020委員会は10月18日、東京体育館で開催された「車いすラグビーワールドチャレンジ2019」大会の「日本vsイギリス」戦の視察会を実施し、熱い応援を送った。視察会は今年度２回目となる。パラスポーツを観戦することで、同委員会のメンバーに競技の魅力と選手たちの活躍を実感してもらうのが狙いだ。車いすラグビー日本代表チームは2018年に開催された世界選手権で優勝した強豪で、2020大会でもメダルが期待される。同大会は世界ランキング上位８カ国が日本に集結して行われた。日本代表チームは20日の３位決定戦で、イギリスとの再戦を制し、同大会第３位に輝いた。

同大会では５日間を通して３万5,700人が観戦に訪れ、パラスポーツでは記録的な来場者数となった。

東京2020大会を契機に、レガシーとして未来に継承

経済同友会では、東京2020オリンピック・パラリンピックの全ての観客席を満席にすることを活動のゴールとして、委員会メンバーが応援する競技や選手を決めて、特定競技の応援を表明する「ひとり一競技」の実践をはじめ、視察会やパラスポーツ運動会（右上写真）の開催など、「行動するDo Tank」としての実践的活動に取り組んでいる。東京2020大会を契機にポジティブな変革を促し、それらをレガシーとして未来へ継承していく計画で、アスナビ説明会やパラ競技団体支援の説明会も継続していく。

●車いすラグビー（ウィルチェアーラグビー）

車いすラグビー（Wheelchair Rugby）は、車いす同士のぶつかりが許された唯一のパラリンピック競技。男女混合で行われ、タックルにより車いすが転倒するなど迫力がある。１チームは最大12人で編成され、試合には４人が出場する。交代は自由。選手は上肢と下肢の両方に障がいがある。障がいの程度によって各人に持ち点を設定する「ポイント制度」を採用している。持ち点は、障がいが軽いほど点数が高く、重いほど点数が低い。選手の車いすに記されている数字が持ち点だ。コート上４人の合計点が８点以内となるようにチームを編成しなければいけない。このルールにより、障がいの軽い選手だけでなく重い選手にも出場機会が生まれる。

「パラスポーツ競技団体への協賛・支援に関する説明会」を開催

9月10日、日本財団パラリンピックサポートセンターの協力を得て「パラスポーツ競技団体への協賛・支援に関する説明会」を開催した。説明会にはパラスポーツ競技団体担当者と支援企業が集まった。競技団体担当者が競技ごとにコストやメリットを説明。スポンサー支援の他、物資やスペシャリストなどの人材派遣、体育館の貸与など支援方法についても説明がなされ、企業との間で情報交換や相談が行われた。

共生社会が育まれる契機に

大西 賢
東京オリンピック・パラリンピック2020委員会 委員長
日本航空 特別理事

東京オリンピック・パラリンピック2020大会に関する経済同友会の取り組みの主眼は共生社会を構築する大きな契機としたいということだと考えています。

オリンピックは、自然発生的に支援の輪は広がっていく一方で、パラリンピックについては、誰かが渦の中心となって、人々の心に火をつけていくことが必要であります。それによって、多様性を持った共生社会が育まれていくきっかけとなると確信していますし、わが国が抱える多くの課題について解決の糸口を見つけ出すことができるのではないかと期待もしています。

まずは、会員の皆さんに実際にパラリンピック競技を体験いただいたり、競技を観戦したりすることで、応援する際のより大きな楽しみを見出していただける。このような思いから、会員によるパラリンピック種目の運動会を開催させていただいています。参加された皆さんからは、必ず、次回も参加したいという声が寄せられます。皆さんの行動する力がこの活動の原点であり、そのような自発的な取り組みの展開が経済同友会の真骨頂ではないかと考えています。皆さんの参加をお待ちしています。

経済界として継続的な応援を

髙島 宏平
東京オリンピック・パラリンピック2020委員会 委員長
日本車いすラグビー連盟 理事長
オイシックス・ラ・大地 取締役社長

オリンピック・パラリンピックは特定のスポンサー企業の支援がアピールされることが多いのですが、実際には多くの企業の協力や支援によって成り立っており、その支援が大会をより良いものにすると考えます。そのため、企業の集合体としての経済同友会がスポンサー以外の方法で支援していくということに意義があります。

東京オリ・パラ2020委員会では、政策提言ではなく具体的なアクション・行動を大前提に運営しており、「ひとり一競技」の支援をベースに、日本財団パラリンピックサポートセンターとも連携しながら、①日本最大規模のパラスポーツ運動会を２年連続開催、②パラスポーツ競技団体と企業のマッチングイベントを開催し、スポンサーやスキル提供や物資支援などのマッチング事例を約10件実現しました。

特にパラリンピックを支援するのは、注目を浴びていないが故に各団体が抱えている課題も多いからです。ロンドンパラリンピックでは、各界を巻き込んでパラスポーツへの関心を高め、「共生」がレガシーとなりました。日本でも「共生」を考える良いきっかけになると考えています。日本車いすラグビー連盟理事長としては、東京パラリンピックで金メダル獲得を目指しています。認知度や観客動員数の向上はもちろん、障がい者・健常者の区別なく、喜怒哀楽を共にし、一緒に興奮できるスポーツとしてシンボル的に育てていきたいのです。

「ひとり一競技」支援には、委員会の枠を超えてぜひ取り組んでいただきたい。交通需要マネジメントやテレワークなど企業活動にも影響するポイントが多くあり、これを機に社会全体が一歩進化を遂げられるように、対症療法的ではなく、根本からあり方を見直す契機となることが理想です。応援するだけでなく、参加する側、作る側として一緒に支援し、オリ・パラの後が「祭りの後」にならないよう、経済界として継続的な応援をよろしくお願いします。

「SOCIAL CHANGE with SPORTS」をスローガンに、D&I（ダイバーシティ＆インクルージョン）社会を実現

小澤 直
公益財団法人日本財団
パラリンピックサポートセンター 常務理事

経済同友会は行動が早かった 会員に協力をいただいている

日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）は、東京パラリンピック大会の成功とパラスポーツの振興を目的に、2015年５月に設立されました。その際、パラサポでは、全国のパラスポーツ競技団体を対象に調査を行いました。その結果、ほとんどの団体がスタッフやオフィス、財源面で不安定な運営状況にあることが明らかになりました。また競技団体同士のつながりもありませんでした。そこで、これらの団体に当センターのオフィスを無償提供し、経理や翻訳、広報などのシェアサービスなど「パラリンピックスポーツの基盤強化」の活動により、競技団体の運営安定化を支援してきました。

その他に雇用や競技の普及などにかかわる費用も支援しましたが、それだけでは不十分であったことから、経済同友会に相談に行きました。団体のファンドレイジングについての相談や出向の協力をお願いしたことで、皆さんとご一緒する活動が始まりました。経済同友会は、行動に移すのが早く、協賛企業としての競技団体への支援のほか、パラサポ事業のパラスポーツメッセンジャーを活用した講演会の実施やパラスポーツ運動会の開催などを通じて、企業の関心も高まっています。また髙島宏平委員長はじめ、幹部の方々の所属企業の支援で一般向け教育プログラムの提供などさまざまな成果を上げています。

パラスポーツ専用体育館「日本財団パラアリーナ」。パラアスリートの練習環境整備を目的に2018年６月、東京都品川区にオープン。稼働日率100%（2019年４月～８月）。（写真提供:日本財団パラリンピックサポートセンター）

打ち上げ花火に終わらないように レガシーとして継承していきたい

パラサポは「一人ひとりの違いを認め、誰もが活躍できるD&I社会」を実現するために、パラスポーツを軸にしたD&Iプログラムを日本全国に展開しています。設立時から大切にしてきたのは、パラスポーツの関係団体・選手・コーチなど障がいのある方々と共に歩み、当事者からの意見やサポートをD&Iプログラムの開発・実施にスピーディーかつ柔軟に取り入れることでした。その方針の下に「パラリンピックスポーツの基盤強化」をはじめ、障がい当事者と一緒に知る、学ぶ、体験する「パラスポーツの教育・普及啓発事業」も行っています。パラリンピック、パラスポーツの総合サイト「パラサポWEB」もその一つです。

経済同友会でも東京2020大会のレガシーとして活動を継承するという方針を立てていますが、それは私たちも同様です。2020が単なる打ち上げ花火に終わらないように継承していかなければなりません。

パラスポーツと現代の企業や社会が抱える課題はリンクしています。パラスポーツをしたり、見たり、知ることで、障がい者に対する見方や考え方が変わり、D&Iへの視界が広がります。パラスポーツには人々の意識を変え、社会を変える力があります。性別・人種・宗教・価値観など、見える違いや見えない違いへの理解も深まり、一人ひとりの可能性を活かすことの重要性に気付くはずです。

今後の主な活動予定（2019年度）

12月 ◆「あすチャレ！Academy・パラリンピックサポートセンター見学会」（日本財団パラリンピックサポートセンター）
2月 ◆第３回パラスポーツ運動会
3月 ◆アスナビ説明会